Lisa Yoshikawa

Making History Matter:

Kuroita Katsumi and the Construction of Imperial Japan

立花孝裕

一九一〇～三〇年代に活躍した日本史学者の黒板勝美が近年の日本史学史研究において注目を集めている。黒板は、いわゆる戦後歴史学からは専ら古文書学や史料保存・文化財保護を確立した人物として評価されてきた。一方、一九九〇年代以降の研究は、史蹟保存等を通じた国民教化や植民地主義への黒板の関与を解明しつつある。

こうした多彩な活動が見られる黒板の生涯を追った、初の本格的評伝が米国で出版された。本書は、現在ホバート・アンド・ウィリアム・スミス大学准教授を務める著者が、イェール大学に提出した博士論文をまとめたものである。①

書評にあたり、まず本書の構成と内容を確認しておきたい。

序章

第1章　歴史家になる　一八七四―九六

第2章　歴史学の復活　一八九六―一九〇八

第3章　歴史学の確立　一九〇八―一八

第4章　躍動中の歴史学　一九一八―二七

第5章　歴史家の明白な使命　一九二七―三六

終章――歴史家の死、歴史家の遺産

序章では、「歴史家という職業を日本で確立し、その目的のために歴史を重要なものにしようとした、この世代〔東京帝国大学②の三上参次、黒板勝美、辻善之助ら「アカデミズム史学第二世代」――評者〕の歴史家を、黒板勝美の生涯と業績を通じて探究する」（七頁）という本書の立場が提示される。戦後歴史学は、国体論との摩擦を回避し「実証主義」に没頭したとされる戦前アカデミズム史学より、その批判者を高く評価する傾向にあった。これに対し著者は、独国のランケや米国のターナーらに比肩する、日本の歴史学の確立者として黒板らを位置づける。つまり、ランケらプロイセン学派はホーエンツォレルン家による支配を、ターナーは米国の西方への拡張を、それぞれ歴史的に正当化する中で自国の歴史学を発展させた。これと同様に、黒板らが天皇制国家の正当化や植民地統治における歴史学の有用性を国家・社会に認識させたからこそ、国家・民間の資金による資史料の収集・保存や、研究機関の設置が可能となったとする。こうした研究基盤の上に、戦後から今日に至る歴史学が成立しているのであり、戦後歴史学が黒板らを軽視してきたのは、今日の「進歩的」見地からすれば、自らの「汚れた基盤」（一八頁）と向き合うことを回避してきたからではないかと著者は批判する。

第1章では、生誕から東大卒業に至る、黒板が歴史家となる背景が論じられる。長崎県の旧大村藩士の家に生まれた黒板は、幕末の尊皇思想の影響が色濃く残る環境で人格を形成した。そして黒板が大村中学校・第五高等中学校を経て、東大に入学した一八

九三年の歴史学界は、久米邦武事件後の混乱の最中にあった。こうした中で、黒板は歴史学の「危機」を痛感しながら、歴史家としてのスタートを切ったとされる。また五高・東大時代から既に、黒板が歴史のアナロジーを用いて同時代における自由主義思想を批判し、「科学的」に南朝「忠臣」の事績を顕彰していたことが指摘される。この手法が、アカデミズム史学の重要性を示す常套手段となってゆくという。

第2章では、黒板が東大助教授への就任を経て、初めて洋行するまでが素描される。まず黒板が歴史学の発達に苦心し、社会の全般的な変化を解明する理論の構築や、考古学・神話学等の隣接学問の発展、そして史料公開による歴史研究の活性化を求めていたことが指摘される。一方、歴史学に対する社会の理解を得るために、雑誌等への執筆を通じて啓蒙活動を行い、教化団体での講演を重ねることによって、国民を教化する上で歴史学が有効であることを宣伝した。また、従来黒板の開明的な側面として評価されてきたエスペラント運動への参加や古文書学の大成においても、黒板の反英米主義、日本中心主義思想が見出されることが指摘される。歴史研究の方法論を提示するとともに、日本の特殊性を強調した『国史の研究』（一九〇八年初版）は、黒板のこうした志向を体現したものとして位置づけられる。

第3章では、黒板の欧米留学と南北朝正閏問題から、第一次世界大戦が終結するまでが描かれる。最新の博物館学の調査を目的とした二年間の洋行は、黒板のナショナリズムと反英米感情をより確かなものにした。帰国後の黒板は日本の「発展」の必要性と、そこでの歴史学や博物館の役割を力説したが、正閏問題は国民を教化する上での歴史学の役割を強調する格好の機会となったとされる。一方黒板は思想善導や植民地統治における史蹟の有用性を宣伝することで、その保存を推進した。こうした事業を通して歴史家は国民教育において重要な位置を占め、次第に文化財保護の法制化や資史料保存機関の設立が進められたという。

第4章では、「大正デモクラシー」期の黒板の動向が論じられる。こうした思潮に対して黒板は、国民教化に資するとされた歴史上の人物の顕彰や、『国体新論』（一九二五年）の発表等を通じ、個人主義といった西洋思想の無批判な摂取を一貫して批判した。前者に関しては、聖徳太子のような「模範的」人物の顕彰事業に歴史家が正当性を与え、名士が資金を援助する構図が形成されたという。また黒板は朝鮮総督府の修史事業に関与するとともに、関東大震災後における東京帝室博物館の復興等にも貢献した。震災による東京の荒廃は史料の包括的な収集・保存の必要を政府に認識させ、東大史料編纂所は大幅に拡充された。この時期の黒板の国家主義的な活動を通して、歴史家は政府にとって必要不可欠な存在になったという。

第5章では、約一年にわたる世界旅行から、黒板が病に倒れるまでが描かれる。国家・社会から歴史学の有用性が十分に認められ、歴史家が多くの国策に参与したこの時期を、著者は歴史学の「最盛期」として位置づける。まずこの世界旅行で黒板が、同時代の日本の領土拡張と重ね合わせつつ、過去の日本人の海外発展の足跡を訪ねたこと、西アジアの過去の遺物に、日本と同じ「東洋」としての共通性を見出したことが指摘される。国内では、黒板は出版社と協同して『新訂増補国史大系』等を出版した。一方、

民間の寄付を財源に朝鮮古蹟研究会や日本古文化研究所といった研究機関を設置し、資史料の保存・調査等を一層推進した。満洲事変以降は、南朝の顕彰事業を通して国民の「覚悟」を説き、また日本の対外侵略を歴史的に正当化することに努めた。一九三六年末に病に倒れた黒板がその後も活動を続けていたなら、黒板自身と彼が基礎を築いたアカデミズム史学は戦後において厳しい批判を浴びたであろうと著者は推測する。

終章では、黒板引退後の歴史学界が素描され、黒板が残した事業や門下生が、戦後の日本・朝鮮での歴史研究や日本社会に大きな影響を与えたことが指摘される。そして改めて、日本の歴史学が、戦後歴史学が批判した帝国の発展と深く結びつきながら発達したこと、それを推進したのが、戦後歴史学が低く評価してきた黒板らアカデミズム史学の歴史家であったことを強調し、本書を終えている。

国家と歴史学との密接な関係を解明した本書が、政府の国体論的歴史観と学術的な歴史研究とを対抗的に捉え、歴史家の国体論への傾斜を「例外」的現象とした戦後歴史学の見解を根本的に批判していることは明白であろう。それでは本書は、近年の研究動向の中でいかに位置づけられるであろうか。[3]

一九九〇年代に国民国家論が国家イデオロギー装置としての歴史学の役割を明らかにすると、国家と歴史学の「共犯関係」を指摘する研究が出現した。[4] また黒板個人については、歴史を通じた国民教化や植民地支配への関与が解明され、国家主義イデオローグとしての注目を集めつつある。[5]

これに対し廣木尚氏は、単に歴史家と国家との「共犯」を指摘するだけでなく、競合する他のナショナルな言説の中で、いかにしてアカデミズム史学が自己を卓越させたかを論じる必要性を説く。そして、黒板が政府の立場を「科学的」に正当化したことで、南北朝正閏問題という「危機」にあったアカデミズム史学の存在意義を提示したことを論証する。黒板のこうした国家主義的活動があって初めて、その後の歴史学が存立できたと指摘する。[6]

以上の研究史を踏まえた上で、本書の特徴を挙げたい。

第一に、渡邉剛氏が指摘するように、[7] 黒板の膨大な著述と門下生らによる回想録を駆使し、黒板の生涯を通史的に叙述した点である。黒板は近年の歴史研究者の注目を集めているが、生誕から死去に至る黒板の生涯を体系的に描いた研究は存在しない。

第二に、廣木氏の指摘を敷衍し、黒板が歴史学の基盤を整備する過程を具体的に検証した点である。すなわち著者は、歴史学に対する社会的承認を自明視せず、研究に必須な資金・研究基盤を獲得するため、歴史学の政治的有用性を国家・社会に宣伝した人物として黒板を位置づける。こうした視点により、国家による「弾圧」と歴史家の「追随」に収斂しない、両者の複雑な関係を解明している。従来の史学史研究では、歴史家の政治力や、研究を支える経済力はあまり考慮されてこなかった。[8]

第三に、歴史学が国家・社会に必要とされたという意味において、昭和戦前・戦中期を歴史学の「最盛期」と位置づけた点である。著者によれば、当該期には歴史学の有用性が十分に認識され、「彼〔歴史家〕らが国家・帝国の設計者となり、アジア・太平洋戦争期を通してそうあり続けた」のである（一九九頁。第5章は

一九三六年で叙述を終えるが、この主張から、著者が敗戦までを歴史学の「最盛期」と捉えていることが読み取れる）。国家による歴史学の承認という要素に着目する、本書独自の見解である。戦後歴史学による史学史研究が影響力を失いつつあるとは言え、当該期をこのように位置づけた研究は存在しない。

第四に、歴史学の基盤における、戦後への連続性を射程に入れている点である。政治と深く結びつきながら歴史学の基礎を築いた黒板が戦後に批判されなかったこと、黒板の学問的貢献が過小評価されてきたことは、重要な論点となろう。

しかし本書には、幾つかの問題点が散見される。

第一に、歴史学へ資金を援助した側の動向を分析していないため、本書の主張がやや説得力に欠ける点である。著者の主張をまとめると、①黒板が歴史学の有用性を宣伝したことで、②歴史学の重要性を認識した政府や名士が資金援助を行い、③その結果として歴史学の研究基盤が整備された、となろう。しかし①と③が丹念に検証されるのに対し、②については、官僚・政治家が具体的にどのように黒板や歴史学を認識し、それがどのように変化したのかという点はほとんど解明されていない。黒板が叙勲を受けたこと（一四九頁、一九八頁）や、結果として研究基盤が整備されたことを提示するに留まる。

それでも、黒板らが史蹟保存の有用性を説き、その法制化が進められたといった直接的な事例（一三二～一四五頁）からは、資金を援助した側が、歴史学の重要性を認識したことを推測できる。しかし、一九一〇年代に「専門歴史家は、〔中略〕国民教育について助言を求められる、過去についての専門的な管理者として受け入れられつつあった」（一四九頁）ことや、「歴史と歴史家は、一九三〇年代には国策を進める上で必要不可欠な要素となっていった」（一九八頁）ことが黒板の活動の結果であることを主張するには、黒板に対する国家の具体的な認識を問わざるを得ない。

さらにこうした姿勢により、本書は専ら歴史家の尽力が研究基盤の整備につながったという、歴史家の側に立った一方向的な歴史像しか提示しない。しかし実際には、歴史家と国家の双方の利害が衝突した結果として、歴史学の発展を見るべきではないか。

例えば関東大震災後に黒板が人心復興のために史蹟保存の必要を説いたにもかかわらず、それが実現しなかった（一七七頁）ことや、一九二〇年代後半に歴史学が大衆的人気を集めたにもかかわらず、歴史学への国庫補助が震災後の予算削減のために停滞した（二二五頁）ことからは、歴史家と国家の「せめぎ合い」の一端が見出される。しかし本書は国家側の動向の分析を欠くため、歴史家が十分に資金を獲得できなかった事実を指摘するに留まる。官僚・政治家の思惑をも検討することで、歴史学と国家との関係を双方向から捉え直す必要があろう。

第二に、黒板の宣伝した通り、歴史学が実際に、どの程度国家にとって「役に立つ」ことができたのかという視点を欠いているため、著者の主張がやや一面的な点である。[9]

例えば著者は、『国体新論』が日本の特殊性を強調し外来思想を批判したことを紹介した上で（一八九～一九四頁）、同書が学術雑誌や教科書等で称賛されたこと、黒板が種々の講演に招かれたことを指摘する。こうした事実を踏まえて、同書が黒板に国体

の専門家としての権威を与えたとし、その延長線上に文部省『国体の本義』（一九三七年）編纂等の国策事業への黒板の参加[10]を位置づける（一九七～一九八頁）。

しかし思想弾圧が激化する一九三〇年代初頭まで、左翼運動は依然として活発であった。これは、黒板らの歴史叙述が国民教化に効果を発揮できなかった証左ではないか。

さらに、国民が「先天的」に有するとされた尊皇心を強調する従来の国体論は、総力戦に必須な国民の主体性を喚起しえないという矛盾に陥っていた。そのため総力戦が現実化すると、国民動員のイデオロギーとしての有効性をめぐって国体論は一層混乱を深めていた。こうした状態に対して、国体に関する政府の公的解釈として刊行されたのが『国体の本義』なのである。しかし同書もまた国民の主体性を否定するもので、ますます国体論の矛盾は深まったとされる[11]。つまり『国体新論』を初めとした「功績」により黒板が『国体の本義』編纂委員に選出されたというより、むしろ『国体新論』等が出版されたにもかかわらず『国体の本義』を編纂せざるをえなかった点に、黒板ら体制派イデオローグの苦境が表れていると言えよう。

確かに戦中に歴史家が多くの国策事業・顕彰事業に参与したことからは、この時期を歴史学の重要性が認識された「最盛期」と呼びうるかもしれない。しかしそれは単に、歴史家が意のままに能力を発揮したのではなく、国体論の抱える矛盾が深刻化する中、歴史家が克服困難、あるいは不可能な課題に直面せざるを得なくなった時期と見るべきではないか[12]。国体論の矛盾という実態を考慮した、より多角的な分析が必要である。本書は日本の国民国家形成と歴史学との関係を普遍的視点から分析するが、「国史」を「天壌無窮の神勅」の実現過程と見なした近代天皇制と歴史学との関係は、普遍的視点のみでは解明しきれないのではなかろうか。

第三に、戦前アカデミズム史学全体の中での黒板の位置を問うた松沢氏の批判[13]ともやや重なるが、本書の分析が黒板の活動に集中しているために、アカデミズム史学全体の動向を単純化している点である。本評では黒板が歴史学の基盤を整備したという著者の主張について留保を付したい。確かに若き日の黒板は史料の公開を説いており（七〇～七二頁）、後の『国史大系』の出版はその宿願の結実と言える。しかし東京への史料の一極集中はその後も継続したこと、アカデミズム史学内部に競合関係が存在したことに注意する必要がある。

戦前・戦中の京大国史を牽引した西田直二郎は東西の歴史研究の学風の差異について、史料を豊富に有する東大が実証的な学風を、史料の量で劣る京大が理論的な研究を発展させたと述べている[14]。さらに井ヶ田良治は、戦後においても古文書の影写本を東京に閲覧に行ったこと、京都の実証研究では戦前以来、限られた史料を「深く掘る」ことで具体的な歴史像を解明する学風が発達したことを回想している[15]。地方での歴史研究の学風に大きく影響を与えるほど、史料は東京に偏重していたのである。

また著者も指摘するように、京都で行われた東山文庫整理事業を黒板が主導し、京大国史の三浦周行と西田直二郎を排除して東洋史の内藤湖南、国語学の吉沢義則を取調掛に加えたのは、東大・京大からメンバーを「公平」に選定した建前を取りつつ、「仕事を円滑に進めるため」、「京大の国史の人々」が「容喙」す

ることを嫌ったからだと坂本太郎は回想している。[16] 著者は東西の対立関係に言及するに留まる（一八二頁）が、評者はこの回想から、史料整理を主導することで、各地の史料を東大が囲い込もうとする黒板の意図を読み取りたい。

以上のことを踏まえると、黒板の精力的な活動は、競合する他の学問領域からアカデミズム史学を卓越させると同時に、東大国史・史料編纂所をその内部で特権化させる営為でもあったのではなかろうか。であるならば、単に黒板が歴史学の基盤を整備したという本書の主張は素朴に過ぎよう。アカデミズム内部の複雑な関係にも目を向けながら、歴史学と国家との関係を慎重に考察する必要がある。

以上の批判は本書の意義を損なうものではなく、むしろその多くは、本書を通じて評者が気付かされた点である。また黒板の評伝という本書の性質上、「ないものねだり」もあったかもしれない。しかし本書の目的が「その〔歴史家という〕専門職が、どのように国家形成の過程と並行して出現し、繁栄したのかという日本の経験を提供すること」（一九頁）だとするならば、これらの点にも留意する必要があろう。

今日、あらゆる研究者にとって競争的資金の獲得が重要となり、自らの研究の社会的「有用性」を主張することが迫られている。日本の近代歴史学の経験を辿った本書は、現在の歴史学の在り方を批判的に再検討する上でも重要な参考資料となろう。評者の不勉強と、語学能力の低さゆえの誤読があることを懼れながら、書評を終えることとしたい。

① 日本国外での研究動向を網羅することは評者の力量を超えるため、本評では国内での研究史上における本書の意義について評するということを予め断っておきたい。シンポジウムでの著者の報告（ヨシカワ・リサ「近代日本の国家形成と歴史学」『立教大学日本学研究所年報』第一四・一五号、二〇一六年）は本書の梗概を紹介するとともに、英語圏での日本史学史研究に関する言及がある。合わせて参照いただきたい。

② 本評では東京・京都の両帝国大学について（前者については「帝国大学」時代を含め）、著者の方針に則り「東大」「京大」と略記する。また両大学の国史学専攻をそれぞれ「東大国史」「京大国史」と略する。

③ 黒板および戦前アカデミズム史学に関する日本の研究史については廣木尚「日本近代史学史研究の現状と黒板勝美の位置」（『立教大学日本学研究所年報』第一四・一五号、二〇一六年）が詳しい。

④ 池田智文「近代「国史学」の思想構造」（『龍谷大学大学院文学研究科紀要』第二五集、二〇〇三年）。

⑤ 高木博志「史蹟・名勝の成立」（同『近代天皇制の文化史的研究』校倉書房、一九九七年）、李成市「コロニアリズムと近代歴史学」（寺内威太郎ほか編『植民地主義と近代歴史学』戸水書房、二〇〇四年）。

⑥ 廣木尚「黒板勝美の通史叙述」（『日本史研究』六二四号、二〇一四年八月）。

⑦ 渡邉剛「書評 YOSHIKAWA, Lisa: *Making History Matter: Kuroita Katsumi and the Construction of Imperial Japan*」（『史苑』第七八巻第一号、二〇一八年二月）二八九頁。

⑧ 人文・社会科学一般については、駒込武ほか編『戦時下学問の統制と動員』（東京大学出版会、二〇一一年）が研究助成制度に着目しながら戦時期の学問動員を論じている。

⑨　この点に関連して、松沢裕作氏は前掲註①の著者の報告に対して、アカデミズム史学の中心的事業の一つであった東大史料編纂所での史料編纂事業が、いかなる経路で日本の国民国家形成に貢献したのかという疑問を呈している（松沢「コメント」『立教大学日本学研究所年報』第一四・一五号、二〇一六年、三四頁）。

⑩　なお著者は言及していないが、黒板は『国体の本義』編纂委員に選出されたものの、同書の編纂会議には一度も出席していない（土屋忠雄「「国体の本義」の編纂過程」『関東教育学会紀要』第五号、一九七八年、八頁）。

⑪　昆野伸幸『近代日本の国体論』（ぺりかん社、二〇〇八年）一八二～一八八頁。

⑫　廣木、前掲「日本近代史学史研究の現状と黒板勝美の位置」二八頁。当該期の修史事業については、長谷川亮一『「皇国史観」という問題』（白澤社、二〇〇八年）を参照。

⑬　松沢、前掲「コメント」三三頁。また、渡邉、前掲「書評 YOSHIKAWA, Lisa: *Making History Matter: Kuroita Katsumi and the Construction of Imperial Japan*」は黒板・平泉澄と史料編纂所グループとの対立に注意を促すが、本評は東大を相対化することで、黒板の活動があくまで東大を頂点とするヒエラルキーを前提とし、それを再生産するものであったことを指摘する。

⑭　「山本四郎日記」一九六三年一〇月六日条（山本四郎『陸軍将校から歴史研究者へ』私家版、二〇一一年、二四～二五頁）。

⑮　「日本史研究会の歩みと今後の課題　井ヶ田良治氏に聞く」（『日本史研究』五八九号、二〇一一年九月）七二～七三頁。また、永原慶二は東大の史料編纂掛の設置により、「古代・中世史、とくに中世史研究の基礎となる史料の独占体制が成立した」ことを指摘している（永原『20世紀日本の歴史学』吉川弘文館、二〇〇三年、四一頁）。

⑯　坂本太郎「古代史の道」（同『坂本太郎著作集』一二巻、吉川弘文館、一九八九年、初出一九八〇年）四九～五〇頁。また坂本は同様に、「三高教授兼京大助教授であった中村直勝」を同事業の非常勤職員に任用したことについて、「京都の国史科の人に全く門戸を閉ざしたのではないという証にはなった」と述べる（同書五〇頁）。

（Cambridge, Mass.: Harvard University Asia Center, 2017, 6×9 inches, pp. 382, $49.95）
（京都大学大学院文学研究科修士課程）